

鬼のような形相で奴は俺を睨んでいる。凶眼と
もいい。元から目つきは鋭い方だが、俺の仕打ちに
とう怒りの沸点を超えたのか。猛獣さながらの凶悪な表
情といったら、今にも俺を食い殺さんばかりの勢いだ。
「アンタ！ 私に一体何をしたの！ こんな事をさせて
タダで済むと思ってるの？」

物凄い金切り声だ。

もう耳が裂けるんじゃないかというほどの怒鳴り声
俺の鼓膜を揺らすわけだが、それしきの威嚇に怯えるほ
ど俺は弱い立場じゃない。

むしろ、俺はとんでもなく優位な立場にいて、そいつ
は喚きながらも抵抗できずにいる。

「こんな事をさせて。だって？ させて、ねえ？ 俺に
は姉ちゃんが勝手にそーいうことをやっているようにし

か見えないけど？」

我が姉、安藤美影は俺にオナニーを見せつけていた。一体どこの変態だろう？

姉はわざわざ俺の部屋を訪れベッドに座り、大股開きで秘所を見せつけるかのような大胆なポーズを取り、俺に淫らな行為を見せている。指をくねらすようにして股間を揉み、上下に擦って刺激する。既にパンツには濡れシミが出来ており、愛液の香りが部屋にほのかに漂っていた。

「勝手じゃない！ 見るな！ 見るなっつってんだ！」
姉はもう必死に怒りを見せつけ、とにかく俺を怯ませようと気張っている。とてつもない痴態を見られているのだ。まあ必死にもなるだろう。

しかし、どうか。

だったから初めから俺の部屋など訪れないで、人前で大股開きになってオナニーを開始するような変態行為をしななければいい。俺がいるにも関わらず、姉は勝手に指でアソコを捏ねくり、頬を赤く染めている。

「姉ちゃんが勝手にしてるだけじゃん？」

俺はゆったり椅子に座って、姉のオナニーを優雅な気持ちで鑑賞中だ。

これは実に気分がいい。

さながら権力者になりきって、王様である自分に刃向かっていた人間に「踊れ」とでも命じて実行させている優越感だ。屈辱的な命令のとして「踊れ」はよくあるものだと思うが、言っている側はこんなにもニヤニヤした気分になるものなのか。

踊るところかオナニーだもの、優越感が途方もないの

も仕方がない。

「勝手になんてしてない！　アంతのせいでしょう！」
親が外出中だからいいものの、やれやれ、姉も声がか
かい。

ま、だからこそいいわけだ。

親の仇でも睨まんばかりの凶悪な表情で、しかし頬か
ら耳までもう真っ赤。屈辱にまみれた声で叫び続ける姿
はもう最高そのものだ。

「俺が何をしたの？　俺は座って見てるだけだろ？　そ
んなに嫌なら、オナニーなんて見せるんじゃないよ。姉
ちゃんが勝手に始めたんだろ？」

「こっちだって見せたくて見せてるわけじゃない！」
姉の指は滑らかに動いて秘所を刺激し続けている。

「へー？　好きで見せてるんじゃないなら、どんな深い

事情があつて弟にオナニーを鑑賞させてるわけ？」

「させてない！ アンタが何かしてるんだ！」

「え？　なんで俺が？」

「とぼけるな！　殺すぞ！」

おお、怖い怖い。

姉の性格上、本当に俺のことなぞ殺しかねない。姉は昔から平気で弟を蹴ったり殴ったりしてきた奴で、俺のことを蔑んでいた。そんな相手に報復行為を許さうものなら、それ相応の方法で返してくるだろう。

だが、そんな心配は一切ない。

何故なら主導権は俺にある。

姉は俺の『操作』に従って動くしかないからだ。

スマートフォン画面をタッチして、俺は思いついた命令を文章で入力する。メールを送信するような気持ち

でアプリの実行ボタンを押してやり、すると姉は動き始める。

姉が俺にオナニーを見せているのは、人間を強制操作してしまいう不思議なアプリのせい、というわけだ。

「な、何！？　今度は何をさせる気なの！」

姉は自分がオナニーを中断し、そして姿勢を変え始めていることに驚いていた。まるで自分の体が勝手に操作され、他人の手で動かされでもしているような困惑ぶりだ。

見ている分には本当に姉が勝手に姿勢を変え、四つん這いになって俺に尻を向けているようにしか見えないわけだが、本人にはそんなポーズを取る意思はない。なんたって俺に『操作』されているだけなのだ。

そう、今の俺には姉の肉体の動きを全てコントロール

する力がある。

が、口ではあえてこう言っている。

「だからさア、それは姉ちゃんが勝手にやってるだけだろ？　なに？　そんなにお尻を見て欲しいの？　なら好きだけ眺めてやるよ。ったく、いいケツだなア？」

俺は白いパンツに包まれた豊満な尻を視姦する。

「実にいいね。姉ちゃんの尻はむっちりと膨らんで、パンツを内側から破らんばかりだ。食い込みのせいでゴムからはみ出る尻肉、くつきり浮き出た割れ目がもう勃起もんだよ」

その方が恥ずかしくて屈辱的だろうと考えて、俺は尻の形や大きさについて一つ一つ声に出して感想を聞かせてやった。

「うるさい！　喋るな！」

「濡れているのがよくわかるよ？ シミになってる。オナニーで随分とお汗が出たんだねえ？ そんなに見られながらするオナニーは気持ち良かった？ たたく、勝手に人の部屋に入った挙句、下半身見せびらかすとか。姉ちゃんってそんな変態だったのかよ」

しつとりと湿ったアソコの部分からは、水分で布地が張り付いたせいか、割れ目が浮き出ていた。

「黙れ！」

「だったらその姿勢やめれば？」

「くっ！ このお！」

姉は『操作』に抵抗し、四つん這いをやめようやめようとして強引に動く。

だが、スマホアプリによる『操作』の力が上回り、見えない力に固定されている姉の体は、きつとそのポーズ

のまま釘でも刺された状態なのだろう。動こう動こうとして抵抗する挙動は見て取れるが、残念ながら腰を左右に振るような動きにしかなっていない。

「あらあ？　おいおい、ケツなんて振っちゃって。腰をくねらせて左右にフリフリするなんて、メスがオスを誘おうとアピールしているように見えるよ？　柔らかい尻肉がプルって揺れているし、本当にエロいねえ？」

「うるさい！　うるさい！」
姉は肩越しに俺を睨みつけ、なおも怒りをあらわにしている。

面白いので、よりケツ振りを激しくするよう命令文を入力し、実行ボタンを押すと同時に姉の尻の動きが素早くなる。

大胆なスイングで左右に振り回し、ハレンチな行動を

取っているにも関わらず、顔では俺に凶眼を向け続けていた。

この顔つきや態度と、そして行動の一致しない姉の有様が俺には最高でたまらない。

「とにかくやめて！」

「やめるって、俺が何をやめりやいいんだ？　俺はスマ

ホいじってるだけだけど」

「そのスマホで何かしてるんでしょ！　どういうトリックか知らないけど、変な電波でも送る仕組みなんじゃないの？」

その通りだ。

俺は以前から『催眠アプリ』というものがあるらしいと噂を聞いていた。人間を自由に操作したり洗脳できるという有り得ない噂である。

初めは信じていなかったが、ひよんなきっかけからはアプリをダウンロードし、実行した結果、これが本物であることを知ったのだ。

命令すれば、相手はその通りに動き始める。

アプリについていた説明書によれば、特殊な電波を送ることで催眠効果を刷り込んでいき、無意識のうちに命令を聞いてしまうものらしい。

本人にはそんなつもりはなくとも、脳に送りつけられた命令で体がその通りに動いてしまう。俺は体験していないのでわからないが、きっと自分の手や足に意思が宿り、好き勝手に動かれるような感覚でもするのだろうか。その気になれば、洗脳や快樂墮ちも可能だろうが、俺にはそんなつもりは全くない。

相手の性格を書き換えて自由にしたとて、その何が面

白いだろう？

むしろ、そいつにはそいつの意思を保たせたい。その上で体の自由を奪われ、身体を勝手に動かされる屈辱を味合わせろ。悔しがる表情を拝んでやるのが志向ではないだろうか。

もしも洗脳をするとしたら、逆に心が折れないように精神力を補強してやる。そうする事で決して折れない女の魂を延々と虐め続けてやることができる。

永遠に悔しい悔しいと叫び続ける。

例えばこんな風にだ。

「見て見て？ 私のお尻」

声帯を操作して台詞を言わせた。

好きな言葉を喋らせることも可能なのだ。

「は？ 何言ってるの？」

「ち、違う！ 別に私は何も言っていないわ！ 今のは違う！」

本人の意思を保ったまま、台詞の一つさえも思いのままだ。

望まない言葉を喋らされた今の姉の気持ちはどんなものか。

想像するだけでゾクゾクする。

もつともつと屈辱を感じて欲しい。

「何が違うんだよ。確かに聞こえたぜ？ 望み通りもつと近くで見てやろうか」

俺は姉の尻に顔を近づけ、じっくり視線で舐めまわした。

やはり、もつちりした丸い膨らみ具合がたまらない。激しいケツ振りの命令は未だ有効なまま、姉は左右に

振り回しているが、そのプルプルした肉の振動で尻たぶが弾んでいる。おっぱいなんかも揺らせば揺れるが、尻もある程度揺れるわけだ。

さて、俺はスマホの動画撮影で姉のケツ振り運動を撮影してやる。

「何してんの！ やめろ！ 撮るな！ 撮るなア！」

あーあー。

声が入ってしまったが、まあいいか。

肩越しにこちらを睨みながらも、お尻を激しく振っている有様をじっくり映し、それから運動を中止させる。ただし四つん這いの姿勢は解かせなかった。

「やめろっていうなら姉ちゃんケツ振るのをやめりゃいいのに、ずーっと続けてたんだから仕方ないだろ？ カメラモードにしてもやめない姉ちゃんが悪い」

俺は肩をすくめながら言ってる。

「ふざけるな！ 勇男のくせに！」

姉は俺の名を叫んだ。

勇男って、我が両親は随分とダサイ名前をつけてくれちゃってるよね。

「パンツ丸見えだよ？」

「うるさい！ 誰が見て言ってるの！ いいから見るのをやめなさい！ 動画も今すぐ消すの！」

命令口調だ。

「いいじゃん別にさ。よく撮れてるよ？」

俺は姉の顔に画面を近づけ、目の前で動画を再生してやる。他でもない自分自身の尻が左右にブンブン振り回され、揺れ動いている画面を見るや、さしもの姉も顔から血の気を引かせていた。

「……アンタ。一体どうしてこういう事をするの？ 私
が勇男に何かしたの？」

——私は何もしていないわよね？ こんな酷いことを
されるほど恨みを買った覚えはなわ！

と、さしずめそう言いたげな強い口調だ。

「別に？ 姉ちゃんはいいいケツしてるし、おっぱいがで
かいよなーとは思ってたけど」

「……うるさい！ あのねえ、さっきの動画は消しなさ
い？ 今ならまだ許してあげるから、どんなトリックか
は知らないけど、とにかくやめて頂戴」

この状況で上からものを言うとはさすがは姉だ。

「だから俺は純粋にスマホいじってるだけだっつーの」

「嘘よ。普通の女が好きでこういう事すると思う？」

「普通はしないね」

「それでしょ？」

「姉ちゃんは変態だったんだ」

「この馬鹿が！　なんでそうなるの！」

パンツ丸出しの四つん這いのくせによく喋る。

さて、では試しにポーズの固定を解いてみよう。四つん這いの姿勢から解放するが、変わりに新しい文面を姉の脳へ送信する。

『美影は弟に攻撃できない』

命令は大きく二種類。

解除しない限り固定で継続されるものと、その場で入力したあいだし効かない瞬間的なものがある。いちいち解除が面倒な場合は瞬間的な命令を行い、継続的に同じ行動を取らせ続けたい場合は固定命令を入れる。

「このお！」

四つん這いが解けるや否や、姉は即座に腕を振り上げた。俺に向かつてビンタを繰り返り出そうとしていたわけだが、ここで攻撃封じの命令が効くということだ。

「——って、あれ？」

姉のビンタはビンタにならず、手首のスナップが俺の頬を打つ直前まではいくものの、ぴたりと止まった。

振りぬけなかった手は俺の肩にポンと乗せられ、姉は弟をぶてなかつた自分に困惑していた。

攻撃できない、とインプットした効果が現れ、命令解除をしない限り、姉は永遠に俺を蹴ることも殴ることもできないのだ。

そう、永遠に。

もし瞬間的な命令だったら、今はぶたれなくても時間が来たら効果が切れ、俺はビンタで頬を腫らされること

だろう。

それを封じるための永続命令というわけだ。

「すぐそうやって暴力だよ。ま、躊躇ってくれたみたいで助かったけど？」

「だ、だって！　ぶとうとしたのに！　アンタが私に何かしたんでしょ！　怒って当然よ！」

「はいはい」

「だいたいね。いつどうやってトリックを仕掛けたかは知らないけど、こんな方法でなきや、姉とまともに話せないの？　だから、アンタはいつまでたっても勇男なんじゃない。一体どの辺が勇気ある男よ。全然勇男じゃないじゃない！　雑魚男の方が相応しいくらいね。この勇気無い男が！」

あー腹立つわー。

うん、腹立つ。

何よりも腹が立つのは、姉は美影っていう割とよさげな名前なのに、俺はイサオとかいうダサすぎる名前なことだよ。

なんだよ勇男って。

確かに普通っちや普通の名前だが、ここまでダサイとキラキラネームの方が俄然マシに思える。

もちろん、光宙と書いてかの電気ネズミの名を読む名前よりはずっといいが、もう少しさ。もうちよつと、格好いい名前をチョイスしろよ。

「この雑魚男が。話しなさい？ どうやって私を操ったの？ どうやって私にあんなことをさせたのか。スマホで何かやったんだらうけど、それだけじゃ有り得ないわよね。でも現実に私はアンタに操作された。そうとしか

考えられない。どうやったの？」

姉は俺の両肩を掴み、険のある顔で問い詰めてくる。なんかこれ、委員長が教室で不真面目な男子を叱ってる風だな。おい。

「どうもこうも、俺は本当にスマホ触ってるだけだよ」
命令を入力し、アプリ中の実行ボタンを押しているだけだから、一つも嘘はないわけだ。

「なら、アンタのスマホは魔法のかかった不思議なスマホだとでもいうの？」

「さあ？」

そうかもしれない。

「何よその態度。姉にあんなことさせた挙句に、シラを切るって、かなり最低だと思うわ。そんなんだからモテないのよ。いい？ アンタみたいな愚図を好きになる女

は存在しない。勇男——いえ、雑魚男ごときに何が悲しくて惚れるのかしら？」

「……」

確かに彼女いませんが、今その話はいいだろ。

「悔しかったらなんとか言いなよ！」

「まったく、姉は一体どっちを怒っているんだ？」

俺が姉を操作したことか？

それとも俺が非モテ男子であることを怒り始めているのか？

話題はそっちに移ったのか？

「勇男！　なんとか言いなさい！」

「あーあ、うるせえよ」

入力しよう。

『俺に抱き付いて甘えまくる』

姉は俺の首に腕を回し、飛びつくように俺をベッドへ押し倒し、全身を密着させてきた。

足が絡んで胸板には乳房があたり、耳横で姉の熱い吐息が蒸れてくる。

やばい、これは勃起する。いや既に尻を見てしていたけど、こうして全身で姉の体を意識すると、より血流が下半身に集中する！

「あ、あれ？ 勇男！ 今度は私に何させたの！」
耳元で怒鳴られた。

「あーもう、鼓膜に響く。姉ちゃんが勝手に俺に抱き付いてるんだろ？」

「抱き付いてない！」

「抱き付いてるじゃん」

「付いてない！」

口では言い張る姉だけれど、胸板に頭をすりすりしてきている。締め付けんばかりに顔を押し付け密着してくる姉の甘え方は、まさしく女の子が大好きな男を捕まえてホールドしているのと変わらない。

「姉ちゃんってそんなに俺が好き？」

「違う！　こんなこと私はしてない。してないのに！」
体では甘え、口では否定。

そして拳は握り固められ、悔しそうに震えていた。